

編纂を終えて

郵政事業全体についての年史類を編纂するのは50年振り、日本郵政の広報部に社史編纂室が置かれたのは2013(平成25)年9月1日である。この50年というのはいよいよ間隔としては長い。伊勢神宮の遷宮ではないが、年史類を編纂するのであれば、せめて20年程度ごとにはするべきであったと考える。主な問題は、資料の散逸と、当時の関係者から話を聴こうにも4~50年前のことだと責任ある立場でかかわった方は亡くなってしまっていることである。

そのほか、編纂に携わってみてつくづく感じたことは、郵政事業は規模が非常に大きい、郵便局について一般的に抱くイメージよりもサービスの種類が多くて複雑である、資料や記録を体系的に保存する文化がない、何かを始める際は華々しく公表するものやめることは公表していないことが少なくない、サービスの業績等の公表の仕方も一貫していない、といったことである。また、編纂の対象期間が長いことの故でもあるが、同種の参照すべき資料の記述の仕方が一貫していない、毎年公表のものでも過去のものとの連続性を顧慮していないのではないかと思わざるを得ないものがある、というようなことにも悩まされた。

一方、インターネットとパソコンの存在は助かった。国会会議録や官報だけでも、紙のものをめくり、カードで記述事項を整理することをしなければならなかった時代であれば、想像を絶する労力や時間が必要であったと考える。ただし、簡単に文書を作れる時代のマイナス面もあった。政府の報告書類を始め資料はある時期からともかく分量が膨大なものが多く、参照して要約するのに苦労した。パワーポイントの多用も文章化がしにくくて困った。自分たちの執筆ではコピーして貼り付けられるものはつい長くしてしまう傾向があった。

よくあると聞くことであるが、日本郵政グループ内の様々な意見等の調整とそれらの反映にも苦労した。索引も、あるべきだと考えて設けることとしたが、事項数が多いことだけでなく、商品やサービスを何度か改称したり、愛称を多用したりしていることも多く、想像をはるかに超える労力を要した。

なお、この『郵政150年史』は1,000ページ程度とすることとしたため、収録しきれなかったことは多くある。また、特に民営・分社化については、その評価を書くべきであるという向きもあるかもしれないが、民営・分社化に限らず、この『郵政150年史』は、郵政事業の経営主体等の関係組織体が公表しているものに基づき史実を記述することを専らとした。評価のようなものは別のところに委ねたいと考えるところである。

いずれにせよ、ともかく『郵政150年史』の発行にたどり着けた。これは、編纂に携わった者として大いなる喜びである。

最後に、編纂に当たっては大島久幸高千穂大学経営学部教授及び齊藤直フェリス女学院大学国際交流学部教授並びに凸版印刷株式会社年史センターの皆さんに多大なる御協力をいただいた。心から感謝申し上げたい。

2022(令和4)年3月

日本郵政株式会社

広報部 社史編纂室

郵政150年史

2022(令和4)年3月25日

発行 日本郵政株式会社

編纂 日本郵政株式会社広報部社史編纂室

編纂協力 大島久幸（高千穂大学経営学部教授）

齊藤 直（フェリス女学院大学国際交流学部教授）

凸版印刷株式会社年史センター

印刷・製本 凸版印刷株式会社